

稱讚 二六一号

二〇二四年九月一日発行

おうそう げんそう えこう
往相・還相の回向に

まうあはぬ身となりにせば

るてんりんね

流転輪廻もきはもなし

くかい ちんりん

苦海の沈淪いかがせん

『正像末和讃』より

まだまだ暑い日が続きます。何卒、ご自愛のうえ
お念仏申しつつお過ごしください。

さて、八月はお盆(旧暦)、九月はお彼岸を毎年迎
えております。

お盆は、亡き方々が、この世に還ってくる期間と
做っております。

浄土真宗では、亡くなった方は、即、仏さまと成
られ、いつでも、どこでも、どんな状態であっても、
いつも私とともに居てくださっていることを、あら
ためて、「そうでした」と手を合わせていただく(縁
と味わう)こととして、ご法要が営まれることであ
ります。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒112-10075

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二四年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

です。この悟った方を、「仏」「仏陀」と言って、仏教
とは「仏に成る」ことが目的であります。「仏に成
る」とは、悟ることであると同時に、迷いから解脱
することでもあります。

「お浄土」は仏さまの世界であり、そこに到るとい
うことは、迷いを脱して、悟りに到るといふことを
「浄土往生」と言います。

「お浄土に生まれる」ために自らの行いを善くし、
お念仏も私のはからいとして、一所懸命に唱える
教えの中で、「往生」が「大変苦勞した」意味に
なってしまったのかもしれない。

しかし、親鸞聖人の仰る「浄土往生」は、私の力で
到ることではなく、阿弥陀さまのはたらきのみだ
から、往生は容易いのだと示されました。往生する
相(往相)が阿弥陀さまのはたらきであると同時に
還ってくる相(還相)も阿弥陀さまのはたらきであ
ります。この還相は、この私を往生させようとする
仏さまのはたらきを言うのであって、私が浄土に往
生してから、この世界に還ってきて有縁の方を救う
仏に成るということではないと思います。

私の心身は「六道輪廻」し続け、迷い続けているの
でありましょう。その私を仏にしよう、浄土に往
生させようと、いつでも、どこでも、どんな状態で
もはたらいてくださっている阿弥陀さまの大きな
慈悲に出遇う機会がお彼岸であります。



お彼岸は、「到彼岸」と言って、「彼岸」はサンスク
リット語で「ニルバーナ」と言い、「悟り」に到ること

特集 金子大榮師のご領解 ㊦

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

一八 宿業への光 (一六一頁)

本文 またいはく、「心歡喜得忍」といふは、これ、阿弥陀仏国の清浄の光明、たちまちに眼前に現せん。なんぞ踊躍にたえん。この喜によるがゆへに、すなはち無生の忍をうることをあかす。また喜忍となづく。また悟忍となづく。また信忍となづく。これすなはち玄談するに、いまだ得処をあらはせず。夫人をして、ひとしく心にこの益をねがはしめんとおまふ。勇猛専精にして、心にみんとおもふとき、まさに忍をささるべし。これ、おほくこれ十信のなかの忍なり。解行已上の忍にはあらざるなり。

口語訳 またいう『観経』に「心、歡喜するが故に無生法忍を得」と説かれた。これは韋提希夫人の眼前に浄土の光明が現われるとき、躍りたち、その喜びによって無生忍を得るであろうことを明かすものである。この忍は、また喜忍とも悟忍とも信忍ともいわれる。それは信による忍であつて、解・行等による忍ではない。

一 本文は善導の『観経序分義』にあることばである。『観経』のはじめに釈尊は韋提希に対し「夫人はやがて阿弥陀仏の清浄の光を眼の前に見るだろう。その時には、その喜びにおいて無生法忍を得るであ

らう」と説かれた。こうして玄談(前もつて語る)しながらそのときを指定されなかつたのは、夫人をして無生法忍を得る期待をもつて専心に浄土を願わせるためであつた。その無生法忍というのは、不断煩惱の身にあたえられる得涅槃である。だからそれは未だ得ずしてすでに得たる喜びの忍であり大悲の仏心が受け容れられたる悟の忍であり、本願に疑いなき信の忍である。それは解による忍ではなく、また行による忍でもないのである。

しかるに無生法忍というは、すでにしられてあるように涅槃に相應する智慧である。したがつてそれは知解によりて了達せられ、修行によりて身証されるべきものである。しかれば知解はいかに明確であつても、無生法忍の了達しないものならば、それは仏法に契うものとはいへぬのであろう。涅槃を得ない学解は、いかに自信がつよくとも凡夫の固執にすぎぬものである。また修行の力によりて死をおそれない境地に達したとしても、涅槃を身証するものでないならばそれは柔軟性のない剛直の性格をつくることとなつたであらう。学解すすんで解忍にとおざかり、修行に努めて行忍を得ることができない。悲しむべきことである。

二 さてこれとそれは解忍や行忍はないということではない。仏弟子の解も行も、その忍を得るためであつた。その解行によりて得らるべき忍が阿弥陀の光によりて解もなく、行もない身に、得られると説かれたのである。それが韋提希のころをうごかして浄土を願わしめたのである。しかして、そこに親鸞が「韋提希とひとしく三忍をう」る感激を歌えるゆえんもあるのである。

三 仏陀は「法に依りて人に依らざれ」と教えられたそれは教えに順うことは自身の道をもとめるため

であつて、説く人をたのむことではないからである。されど教えを聞こうとする者は、説く人を選ばざるを得ない。智徳ともに優れた人の教えでなくては、聴く気になれないのは常識である。ここには「人に依りて法を重んずる」という事実もあるのである。

されど智徳のすぐれた聖賢の教えには、どこかに追隨をゆるさないものが感じられる。それは敬服せねばならないとしても、そのままにわれらの道とすることはできない。その智慧をきわめた人にも真智は無知であるという境地である。されどその無知は、なんらの学解もないわれらの愚かさとなるものがあるようである。修行に退転なき人も「道は自然にあり」といつている。されどその自然は宿業のままにということではないようにおもわれる。ここには智徳の高い人の教えであるというだけでは、その説く法に順いがたいという悲しみがあるのである。

こうしてわれらは、さらにわれらの道となり得る法を説く人をたずねる。その法を説く人は、深く人間の業苦をしっているものであらねばならない。ここに親鸞がとくに七高僧を選んで本師と仰がれたゆえんがあるのであろう。七高僧の説くところは教法の解釈にほかならない。されど、その解釈には人間の業苦をしるものでなくてはと思われるものが感ぜられる。この教法の解釈における人間苦の表面的性格をもつものは、七高僧の説のほかにはない。それが親鸞をしてとくに七高僧にしたしみを感ぜしめたのであろう。善知識とは、われらの身ぢかにありて、われらの道をあきらかにせられるものである。

この親しみを法然のうえに感じたる親鸞も「聖人の御智慧才覚ひろくおはしますに一つならんと申

さばこそ僻事ならぬ」と反省せざるを得なかった。またそれでは法然を善知識と仰ぐこともできなかつたのであろう。われらの親鸞に対する感情もつねにこの境界の反省をもたねばならぬのである。

三

こうして最後に求められるものは、われらとまったく異なることのない根機でありつつ、救いの法を聞ける人である。しかして親鸞はその人を求めて韋提希夫人を見いだせるものであった。夫人にはなんらの智徳もなく、ただ夫王に順うことのみが婦道であると思われていたようである。したがってわが子欲しさに仙人を殺すことにも、その子が自分たちのためにならないということでも高殿から産み落とせることも、ただ夫王の意志に順うほかなかつたのであろう。またその産み落とせる子を拾い上げて育てたことも、さらに夫王の幽閉せられたるところに食物を運べることも、女性の本能に過ぎないのである。そこには自覚による自由というよ

うなもの認められない。さればこそ苦悩に迫られては、「世尊、われ、むかし何の罪ありてか、この悪子を生ぜる。世尊、また何等の因縁ありてか提婆達多と共に眷属たるや」といわざるを得なかつたのである。

しかるに、この韋提希の繰言に対して釈尊は、なんの応答もせられなかつた。それは平常の釈尊の教化を知る者には、怪しむべき事実である。平常の釈尊ならば、韋提希の繰言は愚痴にすぎないことを説き、いまこそ愛欲の禍害をしりて出家せよとすすめるべきはずである。そのような教化によりて仏弟子となれる尼僧も多いのである。しかるにどうしてそれが韋提希を教化する道とならなかつたのであろうか。ここには釈尊も自身のさとれる聖道

の境界に当面せられたものがあるようである。しかしてその境界に当面せしめたものは韋提希の苦悩である。その韋提希の苦悩は、釈尊の聖道的智慧では、どうしても解決のつかないものであった。

それはなにゆえであらうか。韋提希はその苦悩のうち生きねばならぬ身であったからである。その日までの行為は、いかに愚かに見えても、そうするよりほかなかつたものである。それは悲しむべきものであつても、責めることのできないものである。それは独り韋提希のみではない。すべての人間の業苦ではないであらうか。とすれば、愛憎の業縁をそのままにしてその苦悩の解消されるところがなければならぬ。しかして、そのところにすべての人をして、涅槃せしめることこそ如来の悲願でなくてはならないのであろう。これによつて釈尊は往生浄土の道を説かれたのであった。しかしてその大悲の教説によりて釈尊の御智慧の深広なることが顕されたのである。

思うにこの韋提希に対する釈尊の教化は聖道的でなかつたことから、浄土教は仏法でないという説もあらわれることになつたのであろう。されどもし、そうとすれば、釈尊も印度に生まれられた一人の聖者にすぎないものとなるのである。しかれば釈尊こそ世界史上における人類の教師であることをあきらかにするものは浄土教であるといわねばならない。それが親鸞をして、「如来、世に興出したまふ所以は、ただ弥陀の本願を説かんがためなり」と讃嘆せしめたものである。

四

こうして浄土の教えは未来の光を与えるのである。されどその光に恵まれるものは、現在の人間生活であり、とくに救われるものは過去の思い出である。死に向かいつつある人間にとりては過ぎ来し一

生は空しき悪業であつたということほど悲しいことはない。たとえそれはいかに苦悩の多いものであつても、そうあるよりほかなかつたものとして、大悲同感せられるものあらば、そこによるこびは見いだされるのである。しかして、その大悲をあらわすものは阿弥陀の本願であり、その喜びを感ぜしめるものは念仏である。

しかるに日常の知識は、この過去を問題としないだから現在の苦悩といつても、解決を未来に求めていくものである。しかしてその未来が過去を救うものと思つているのである。そこに「悔い改める」とが道徳であると思われているゆえんもあるものであろう。されど人生そのものに問題となるものは、思い出の過去ではないであらうか。「つねに没し、つねに流転して」と反省せしめる過去が「出離の縁あることなし」と未来を暗くするのである。そこに人生のあり方を知る者は、ただ念仏のところに、懺悔せしめられるのみである。念仏が懺悔の水となりて人間生活を浄めるのである。しかしてそれによりて動乱の人生が涅槃への道と転成せられるものである。

しかれば人間生活のいかなるものであるかを思い知らせるものは、過去の経験のほかにはない。すでに宿業と感ずるもののみが、真に人生を知るものである。しかしてその宿業感のみが、如来の悲願を信知するのである。

五

この宿業を離れ得ない人間であることを思い知らしめたものは『観経』における韋提希であつた。それが親鸞をして韋提希に親しみを感ぜしめたのである。とすれば、その韋提希はとうぜん煩惱具足の凡夫であると思われていたのであろう。善導も韋提希を「実業の凡夫」として親しまれたのであつた。

往生と成仏について

徳永 一道氏

『ビハラーの往生と成仏』

ビハラー医療団編

二〇一五年八月二十九日三〇日

第一五回ビハラー医療団研修会講演録

いかと思います。この問題を軽く考えたら、仏教の問題は出てこないと思います。

「後生の一大事」というのも、まさにその問題ですつまり、仏教の問題にすべき究極のところは、生死にあるということなんです。生死の問題を、どのように受け止めていくか。これはなかなか一概に言えないことですが、「死」という厳然たる事実は間違いないことですが、やってきます。それは仏教がずっと強調し続けてきたことです。この問題を救わない限り、これを前提としない限り、「往生」という問題は扱えない。「往生」とは、まさにこの問題と密接に関係しているということなのです。

浄土教と死

特に浄土教は、この問題に敏感で、ずっとそれを扱い続けてきました。

人、世間愛欲のなかにありて、独り生れ独り死し、独り去り独り来る。行に当りて苦樂の地に至り趣く。身みづからこれを当くるに、代るものあることなし。

〔大無量寿経〕卷下・註釈版聖典』五六頁)

これはよく知られた御文です。「独生独死独去独来と漢字を連ねて言いならわしてきましたが、「生まれてきたのも独り、死んでいくのも独りだ」ということを言っているわけです。「身みづからこれを当くるに」と、誰も代わってくれない私自身の問題だと言っているのです。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごたはごこと、まごたあることなきに、ただ念仏のみぞまごことにておはします、とこそ仰せは候ひしか

〔歎異抄〕後序・註釈版聖典』八五四頁)

この世のことを「火宅無常」と表現しています。わ

しかるに親鸞には、また韋提希を「権化の仁」とも感ぜられたようである。それが古来の問題となっているのである。

その親鸞の感情を推究すれば『観経』の教説も一つの物語であるというものがあるのではないであろうか。韋提希の求道は実話であるとしても、それがわれらに感銘を与えるゆえんは、物語りとして伝えられたからである。もし韋提希の求道が実話であるに止まらば、浄土の教えも、釈尊の教化の一方便にすぎないと思うのが正しいかもしれない。しかれば浄土教に普遍の真実あることを思い知らしめるものは、韋提希の求道が物語りであるからではないであろうか。そこには物語りでなくては、どうしても感知することのできないものがあるのである。

しかれば、韋提希は「実業の凡夫」であるか、それとも「権化の仁」であるか。それを矛盾なしに感ぜしめるものは、韋提希が物語りのうちの人であるということであらねばならない。こうして物語りがそのまま教法となり、教法そのままが物語りとなる。そこに浄土經典の親しみもあるのである。

金子大榮氏が仰る「宿業は、三世(過去世・現在世・未来世)における、その人の業(行為)ではなく、この現実の世界において、その人自身の心身のはたらきの範囲で捉えておられると思います。その体験・経験が意識の中にあるかないかに関係なくです。

『仏説無量寿経』でも三世の業は説かれているのですが、それは、阿弥陀さまのご本願のはたらきを顕しているのであり、決して、私の業を示しているものではないと思えます。

仏教と「死」

ところで、何をもって「死」とするのかという問題は、なかなか仏教側からでも解決がつかないのでそこで、長い間仏教が教えてきた「死」という問題について、皆さん方と一緒に考えてみたいと思います。

死の問題は、「無常」という言葉で言い換えてもいわけです。「無常」のほうが範疇が広いと思います。釈尊の出家の動機が生老病死であったことは、みなさん方もご承知のことだと思えますが、それは「無常」のことでもあります。いわゆる「四門出遊」の話は、後につくられたものだろうと思いますが、釈尊のそのエピソードは生老病死という命題の下に出来上がったものです。釈尊の出家の動機は「生老病死」でしたが、つづめたら「生死」の問題であるということになります。

仏教では、「生」の一番後ろに「死」が来るというように受け止め方はしません。生と死は表裏のものである。ペアになっているのです。死の問題は、われわれ誰にでもついてくる深刻な問題ですが、日常は目をそらすようにして、できるだけ目を向けないようにしています。しかし、それに目を向けさせるのは仏教者の務めだと思えます。どこまで「死」ということをお同行に意識させるか、あるいははたたき込むかということが仏教者の務めではな

れわれの生きているこの世界は燃えている家と同じことだと。これは『法華経』のたとえ(三界無安猶如火宅)で火宅無常の世界に、われわれは生きていると。「よろづのこと、みなもつてさらうこととは」と、つまりこれは事実であつて、人間の営為はすべてそうではないかと『歎異抄』独特の表現で言っているのであつて、別に厭世思想を述べているわけではありません。

『御文章』に「白骨の章」というものがあります。「白骨の御文」です。これも読まずとも百も承知の御文だと思ひます。これには原案があるそうですが、それに蓮如上人が抛られたそうです。これも読んでみると身が引き締まる、慄然とするような、まさに名文ですね。要するに、われわれは死んでいく身であることを言っているのです。その「死」の問題をどのように解決するのか、それが往生浄土の問題になります。往生浄土の問題は、一番の契機は「死」という問題をいかに解決していくかということ、それは往生浄土という浄土教的な解決の方法なのです。

往生浄土の問題

往生浄土が、本日のトピックになっているわけですが、往生とはどのようなことなのか、往生成仏とは何なのか。これは浄土教の一番中心的な課題と言つてもいいですし、また仏教の中心的課題と言つてもいいのです。もつと広く言えば、これこそ宗教が扱うべき問題である、宗教以外が扱えないという問題なのです。

その往生浄土の問題が、真正面に出てくるのが浄土教で、浄土教は「死」を「往生浄土」という文脈で捉える。往生浄土という文脈のなかで「死」というものを捉えていくのであつて、もちろん、「生」もそ

の延長線上でとらえているわけでは、
往生浄土がなければ、浄土教は成り立たないと言つても間違いないのですが、これはいったい何を意味しているのだろうかということを考えていきたいと思います。

「臨終業成」と「平生業成」という言葉があります。親鸞聖人以前の日本浄土教では、臨終に浄土往生の条件が整つて浄土に生まれるということが主流をなしていた考え方でした。ところが、親鸞聖人によつて、「平生業成」という概念が持ち込まれました。いったい、この原動力は何だろうかということ、「平生業成」を成立せしめるものは何かというのが一番大きな問題になります。

『御和讃』に次のような言葉があります。
生死の苦海ほとりなし
ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

(高僧和讃「龍樹讚」『註釈版聖典』五七九頁)
どこへ渡してくれるのかというと、弥陀弘誓の本願の船が生死の苦海を渡して、浄土に連れて行つてくれるのだと言つているわけです。

無明長夜の灯炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障おもしとなげかざれ

(「正像末和讃」『註釈版聖典』六〇六頁)
われわれの立場からすれば、人生は、この世は真つ暗闇の長い夜と同じことだと。しかし、心配することはない、悲しむことはない。智慧の眼はないと言つて悲しむことはない。心配しなくてもいい、罪障が重いとつても沈むことはないというわけです。なぜなら大悲の灯に照らされ、本願の船、筏

に乗せられているからだ。これは他力の救済ということ、しかも臨終の救済ではなしに、今の救済を親鸞聖人は強調されたということです。

その結果として、往生は語られたのであつて、一番大事なのは「他力の救済」「他力のはたらき」ということです。ここで言えば「弥陀弘誓のふね」「生死大海の船筏」が他力のはたらきであつて、阿弥陀のはたらきに乗せられて、われわれは迷いの人生を終えることができるということと言っているわけです。

問題は、この和讃をつくられた意図はいつたどこにあるのかということになります。浄土往生が目的かという、それも否定できないことですが、もつと大事なのは、これらの和讃がつくられた意図はどこにあるかということです。それは現在われわれにはたらいっている「弥陀のはたらき」なのです。「弥陀弘誓のはたらき」を、親鸞聖人は明らかにしたかったということです。

往生浄土は、その結果として語られていくものであつて、一番大事なこと、今われわれにはたらいっている、あるいはわれわれを乗せている「弘誓のふね」であるということをおつしやりたかつたわけです。親鸞思想の力点は、そこに置かれてくるということ、そこから本日の「往生と成仏」の問題が派生してくる。これはそこに基つて語られなければならないというの、私の考えるところです。

今、ここではたらいっている「本願のはたらき」は、私のいのちが終わるまで待たなければいけないということではありません。われわれは今「本願のはたらき」に遇うことができる、あるいは、それは現在もわれわれにはたらいっているのだということです。これは第十八願に三心・十念をそなえたら、必ず浄土に往生するということが誓われてある。

「至心」「信樂」「欲生」という二つのところを乃至十念、すなわち十回までの念仏を称えたら往生できると言うことが誓ってある。その本願が成就したという御文(『大経』巻下)を見ますと、このようになっています。

あらゆる衆生、その名号を聞き信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生まれんと願すれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

〔大経〕巻下「本願成就文」・『註釈版聖典』四一頁) この御文は、親鸞聖人流の読み替えです。如来のはたらきによって、我々は信心歡喜する身にさせていたでいて往生もその結果として出てくるという意味になります。それは如来の至心回向のはたらきのなせるところであると言っているわけです。

そのはたらきで、「すなはち往生を得」、原文は「即得往生」ですが、この「即」という字をめぐる議論が発展しました。いまだに、いろいろと意見が分かれているところです。これは即得往生について、親鸞聖人がそのように理解されていたのかということでもあります。

「すなはち往生を得」をめぐる、信心を得て願生心が生じたら、そのときに往生はできるのだというつまり信心獲得の一念のときに往生を得るといふ説、あるいは信心獲得した人は、いのち終われば直ちに浄土に往生するという説と二つに分かれています。

皆さん方が往生問題を勉強されるとき、あるいはお聞きになるときは、この二つを整理してお聞きになったらいと思ひます。どちらにも言い分があるわけです。往生するのはいつかという問題ですが信心獲得の信心をいただいた、信心を得たその瞬間に往生することなのか、信心を得た人は「このいのち終われば直ちに」という意味の「即」なのか、この二つの見方に分かれて入るわけです。

どちらで理解されようと自由ですが、私の考え方は、やはり、何らかの根拠があつておっしゃっているわけです。

後で申しますが、「現世での成仏」と誤解しやすい親鸞聖人の文章がいくつかあります。現世での成仏という、現世で信心を得たその瞬間に成仏する、あるいは往生するという理解をなさる方と、そうではないと主張される方に分かれてしまっていて、いまだにその論議がつづいているのです。

親鸞聖人は、現世において往生成仏、浄土に往生するのだ、直ちに成仏することですから、浄土に生まれるということは仏になるということ、これは成仏ですが、そういうことをおっしゃったのかどうか。現世での往生成仏をお説きになったのかどうか。

これについて、以前に、岩波書店から『岩波仏教辞典』が刊行されたときに、大きな問題になりました皆さんの中には覚えていらっしゃるかと思ひますが、平成二年のことです。『岩波仏教辞典』の「親鸞」、あるいは「親鸞の往生」というところに関して、われわれの宗派から見ると看過できないような記述があつたわけです。そのため、岩波書店に対して本願寺派から申し入れた事実があるのです。

その申し入れの文章は大変慎重に作成しました。それをもって事務局の代表の名前で抗議しましたが、作成したのは私どもです。

このことについて、有名な仏教学者の中村元とい

う先生が『毎日新聞』に書いています。

極楽浄土にいつ生まれるのか? 『岩波仏教辞典』(編集、中村元東大名誉教授ら四氏)に不適当な点があるとして、二十日同社に訂正を申し入れた。

同派の指摘によると、『教行信証』の項目で「この世での往生成仏を説いた」とあるが、親鸞は「命終わって浄土に往生して直ちに成仏する」と説いているのであり、現世で命あるうちに成仏する、というのは明らかな誤り。

「親鸞」の項目で「他力(阿弥陀仏の力)信心による現世での往生をとき」とあるが、「現世での往生を認めていない」とする学者が多く、一方の説のみを記述するのは不適当。

〔毎日新聞〕平成二年七月二十一日) 「往生」という言葉は大変幅がありまして、いろいろな解釈の仕方が可能ですが、この『岩波仏教辞典』は、一方に偏って親鸞は現世での往生を説いたのだと限定してしまつたわけです。われわれはそのことに對して異を申し立てた。この後に岩波書店は訂正します。一応、非は認めただけでしょう。第二版から変更されています。

『岩波仏教辞典』によると、親鸞はこの現世での往生成仏を説いたという、この世で信心獲得のときに浄土に往生して仏になる、覚りを開くことを説いたといふのですが、親鸞はそんなことを説いたのかというのが、われわれの大きな疑問です。

現世での往生は、これは現代人には受ける説です。仏教は死んでから先のことではなく、今の問題だと。往生成仏を現世に引き戻したら、若い人は賛同するわけですが、親鸞がそのことを言っているのかどうかという問題です。この現世の往生についてたくさんの方が賛否両論を述べておられるのです。

〈次号に続く〉

秋季彼岸会法要のご案内

「浄土への道は

浄土から開かれたものである」

日時 九月二十三日(月・振替休日)

日程 一二:三〇 門徒総代会

一四:〇〇 おつとめ

『観無量寿経』

一四:四〇 おはなし

一五:三〇 恩徳讃

茶話会

一六:〇〇 終了

〈門徒総代さまへ〉

稱讚寺の門徒総代さんの任期が二〇二四年三月三十一日で任期満了を迎えました。長らくご就任頂いておりますこと、誠にありがとうございます。つきましては、ご再任の確認を含めて「寺則」の見直しを行いますので、判子をご持参頂きますようお願い申し上げます。

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

【へいわフォーラム2024】

期日 九月一七日(火)

時間 一三:三〇～一五:三〇

会場 築地本願寺 本堂

※参加費無料・申し込み不要

【第四回千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要】

期日 九月一八日(水)

時間 一二:四五～一四:二〇

会場 国立千鳥ヶ淵全戦没者墓苑

世のなか安穏なれ

仏法ひろまれ

講師プロフィール
東京都立国際高校卒業。札幌医科大学卒業後、沖縄米海軍病院で初期研修。浦添総合病院麻酔科などでの勤務を経てUSMLE（米国医師国家試験）合格。米国イェール大学病院で救急研修医を修了後、米国救急専門医を取得。カリフォルニア州立大サンディエゴ校でプレスホスピタル・災害医療のフォーシップを終了、2017年からアトランタ・エモリー大学救急部の助教授を務め、同年、日本人として初めて米国プレホスピタル・災害医療専門医を取得。現在はメトロアトランタ救急搬送組織の医療ディレクターも兼任し、2023年、米国DMAT隊員となる。MSFには2009年に登録。以来シリア、イエメン、パキスタン、イラク、南スーダン、ナイジェリアなど合計8回の海外派遣活動に参加。現在は米国を拠点にMSFの活動に参加する。2017年～2020年、MSF日本理事。2019年～2020年、

主催：浄土真宗本願寺派「御同部の社会をめざす運動」東京教区委員会

へいわフォーラム
-2024-

講演テーマ
国境なき医師団の活動から戦争を考える

講師
中嶋優子
MSF 国際災害医療専門医 (ICM) 日本代表 救急医 麻酔科医 救急医
©MSF

2024年9月17日(火)
13:30～15:30 講演(60分) 対談(30分)

対談者：南條了瑛（東京教区実践運動主幹 / 東京都法重寺住職）
コーディネーター：西出勇志（一般社団法人共同通信社 編集委員・論説委員）

参加費無料 / 申込不要 会場 築地本願寺 本堂
東京都中央区築地 3-15-1

の活動に参加する。2017年～2020年、MSF同副会長。2022年3月より現職。東京都出身。

第44回千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

浄土真宗本願寺派（西本願寺）では、戦争によって尊いのちを失われたすべての方がたを追悼し、悲惨な戦争を再び繰り返してはならないという平和への決意を確認するため、東京・国立千鳥ヶ淵全戦没者墓苑において、「全戦没者追悼法要」を勤修いたしております。

日時：2024(令和6)年9月18日(水) 12:45～14:20(予定)

※当日の様子は浄土真宗本願寺派 HP 及び「YouTube」にてライブ配信いたします。

主催 浄土真宗本願寺派（西本願寺）

問い合わせ先 浄土真宗本願寺派(所務部文書担当) …… TEL: 075-371-5181



稱讚寺八月行事予定

16日(日) 午後2時
のんのん法話会



23日(月・祝)
12:30 門徒総代会
14:00 秋季彼岸会法要

叱しかられた

おん わす
恩を忘れず
墓参り

二〇二四年「心のともしび」九月カレンダーより

最初に、輪廻を肯定するような態度は仏教ではない旨を、述べたいと思います。一九七〇年代以降、臨死体験の研究が急速に進展しました。それと歩調を合わせるようにして、輪廻ということでは何か希望の未来が連想されるような傾向が出てまいりました。つまり「死は全ての終わりではない。死後も無限に成長する道が開けていることを輪廻説は教えている」といった受け取り方です。これは少なくとも仏教ではありません。

仏教を含めた印度の宗教において、輪廻は希望の原理ではなく、陰鬱な事実なのです。私なりに表現するなら、輪廻説の核心は「死んだらそれでいいことになるなどといった甘いことを思うなよ」ということです。そういう厳しいメッセージです。言い換えれば、輪廻説の核心には「お前がしたことの後始末は、お前自身がつけねばならないぞ。たとえ死んだからといって、この責任から逃れることはできないんだぞ」というメッセージがある。すごく厳しい陰鬱です。だからこそ釈尊は「この陰鬱なサイクルから早く出なさい」と、解脱を強く勧めておられるのだと思います。

さて、輪廻説をこのような視角で見直しますと、ハタと気づくことがあります。それは、輪廻の世界とは、私たち自身の迷いの心のあり方そのものが投影されているということです。どういふことかという、輪廻の世界とは、どこまで行っても行為者本人に責任を取らせようとする世界です。このやまざる責任追及態勢は、私たちの心そのものの本質的な在り方ではないかと気づかされます。即ち、私たちは深層心理において、断固として輪廻を要求してやまないという迷いの在り方をとり続けているのです。…私たちの心には、こういう応報、道徳的責任追及という縛りが抜き難くあって、この応報の

実現をこの世を超えてどこまでも求める心根を現に持つてしまっている。ということは、すなわち全員楽果悪因苦果、つまり「善い行為はたたえられよ。悪い行為は罰せられよ」という、これにのっとった輪廻を現に要請してしまっているということではないでしょうか。…応報の必然性には時間は無関係だということですが、どれだけ時間がたとうが、応報の必然性はいさきかも揺るぎません。私たちは、応報の必然性をいわば無時間(つまりは永遠)の事柄と見なしているのです。そしてこの無時間的な応報の必然性が現象世界で(つまり時間の中で)実現されねばならないとなると、それは無限の時間を前提とした応報、すなわち輪廻というかたちを取るよりほかはないことにならないでしょうか。…

こういう応報を要請する心根から完全に脱却し、輪廻的世界から解放され、もはやいかなる個体にも生まれることなく、いかなる苦をも繰り返さないようにと勧めているのが釈尊の教え、仏教です。そして、それは私の力では絶対にできないと教えているのが浄土真宗です。

【仏教文化公開講座講演録】

『仏教・浄土真宗における「輪廻転生」の説示』

(松尾宣昭氏)より抜粋

思うに、「輪廻」と「輪廻転生」は異なるのだらうと思えます。親鸞聖人は、「流転輪廻」とは仰っておられますが「輪廻転生」とは一度も仰っておられませんが、「輪廻」を別の言葉では「生死」「迷い」と言われ「苦」を表します。仏教は、その「輪廻」から「解脱」することであり、その「転生」は「解脱」ではありません。「流転輪廻」の身でしかないと知らされることから「輪廻」を超えることに繋がるのでしよう。